

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2011年1月7日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 181】

JR東日本の革マル派排除の意欲は本物か！？

引き続きJR東労組松崎明元会長の死去による労使関係の変化について検証する。前号に続き、JR総連元副委員長の四茂野修氏による「われらのインターVol.11」(2008年7月15日発行)の連載記事「一連のJR総連弾圧を仕組んだ者たちの素顔(上)」を紹介したい。四茂野氏は、前述の怪文書の真実性について、以下の通り分析している(p.31~)

2. 仙台で開かれた「極秘会議」

『週刊現代』の24週にわたる連載に加筆・修正し、昨年7月に出版された西岡の『マンガローブ』には次のような記述がある。

また現在のJR東日本経営陣の最高幹部である大塚陸毅会長や清野智社長も、JR東日本発足当初は、松崎によるJR東日本の経営権への介入に強い危機感を覚えていた。野宮氏(注:JR東日本初代勤労課長、故人)の元部下が証言する。「90年のことです。仙台のメロポリタンホテルに当時、人事部長だった大塚さんと、総務課長だった清野さん、野宮さんら人事・労政関係の幹部が極秘に集まり、今後のJR東労組対策について話し合ったことがありました。その席で大塚さんは『せめて仙台(支社)だけでも、われわれが望む(松崎に支配されない)労使関係を維持してほしい』と話していました。そして(組合から革マル派を排除した)JR東海やJR西日本の労政に触れ、『あのような単純な手法は少なくとも、JR東日本にとっては愚の骨頂だ。あの連中(革マル派)にはアメ玉を食わせ、時間を十分かけ、次第に牙がなくなるよう対応し、ついには牙がなくなってしまう—というような遠大な計画が、JR東日本の革マル派戦略だ』と強調していました。清野さんは『社員教育をしっかりとやれば(革マル派による支配は)、必ず防げる』と語っていました。極秘会議に出席した若手幹部からは『いつこの異常な労使関係から抜け出せるんですか』との悲痛な声も出ていましたが、清野さんは『なんとか軟着陸をめざすしかない。時機を待つことだ』と答えるのが精一杯でした。大塚さんも清野さんも、少なくとも90年時点までは、松崎とベッタリと癒着した住田-松田体制の見直しを図らなければ、と真剣に考えていたのです」

ここには会長・社長の実名まで書かれているのに、私の知る限りJR東日本はこれを否定するコメントを出していない。まして名誉毀損の訴えも起こしていない。「大人の対応」をして、無視したということなのだろうか。それとも、前述の怪文書と合致するこの発言が実際にあって、コメントするわけにはいかないのだろうか。ちなみにこの部分は、『週刊現代』の連載にはなく、『マンガローブ』を書く際に付け加えられたもの。ただ、この直前にある、故人となった二人の幹部に関する記述は連載にもあった。一人はJR東日本初代勤労課長の野宮一樹氏で、もう一人は初代人事課長の内田重行氏。「松田-松崎路線に異を唱えた」「良識派幹部」として紹介されている。

革マル対策の極秘会議の存在にコメントしない会社の意図は？

JR総連・東労組側は、JR東日本が『マンガローブ』の記載にコメントしないのは、革マル派対策の極秘会議の存在や、そこでの発言が事実であるからだとみているようだ。

松崎氏が死去したことで、JR総連・東労組の焦りは募りに募っていることだろう。一方、これまで、革マル派に支配された異常な労政の転換を願いながらも、息を潜めてきた経営幹部は、今日の情勢をどのように受け止めているのだろうか。

次号では、四茂野氏の記事に基づき、JR東日本の革マル派戦略の存在を裏付ける証言記録について検証したい。